

## 「絵金ブーム」の歴史社会学的考察

小 松 秀 雄

A Sociological Consideration of the History of the “Ekin Boom”

KOMATSU Hideo

## 要 旨

高知県（昔の土佐の国）では大きな芝居絵屏風を飾る夏祭りが行われ、土佐の夏の風物詩として地域の人びとに親しまれていた。芝居絵屏風は大きな（180 cm×180 cm）二曲一隻の屏風であり、弘瀬金藏（1812-1876）、通称、絵金が芝居絵屏風を描き始めた。江戸時代後期から明治時代まで土佐の国では、農村舞台で歌舞伎や人形浄瑠璃などの地芝居が上演された。人びとは芝居絵屏風を絵金に描いてもらい、夏祭りの機会に神社やお堂に奉納した。しかしながら、日本の近代化の過程で映画が普及し、娯楽が多様化するにともない、夏祭りに芝居絵屏風を飾ることも少なくなった。絵金の死から約90年後、1960年代における対抗文化の時代背景の下で絵金と彼の芝居絵屏風などの作品が再び注目されるようになった。絵金の画集などの本が出版されたり、絵金の映画が全国の映画館で上映されたり、東京、大阪、京都、神戸の有名な百貨店で絵金展が開催された。新聞や雑誌などのマスメディアによって名づけられた「絵金ブーム」が到来した。本論文では、歴史社会学的視点から、「絵金ブーム」に関する多様な資料を分析し論述してみる。

**キーワード：**絵金、芝居絵屏風、ブーム、土佐、歴史社会学

## Abstract

Some locales of Kochi Prefecture (formerly Tosa Province) held summer festivals to display Shibai-e screens; a Tosa summer tradition. Shibai-e screens are large (180 by 180 centimeters) two-panel folding screens that were painted by the artist Hirose Kinzo (1812-1876), known as Ekin. In the Tosa province, Jishibai (rural forms of kabuki or traditional puppet theater Ningyojoruri) were performed on rural wooden stages from the late Edo period to the Meiji period. People had requested Ekin to paint Shibai-e screens to dedicate to Shinto shrines, or Buddhist temples during their summer festivals. However, the during the modernization of Japan the spread of the movies and the diversification of popular amusements resulted in the decline of summer festivals to display Shibai-e screens. Approximately 90 years after Ekin's death, under the historical context of 1960s and the age of counter-culture, Ekin and his works returned to the public eye. The collecitions of Ekin's pictures were published and the movie of Ekin shown in the movie theaters throughout Japan. Moreover, Ekin exhibitions were held at the famous department stores in Tokyo, Osaka, Kyoto, and Kobe. The "Ekin Boom", as refered by some newspapers or magazines, had come. This paper analyzes and discusses various materials on the "Ekin boom" from the perspective of historical sociology paradigm.

**Keywords:** Ekin, Shibai-e screens, boom, Tosa, historical sociology

## 1 はじめに

高知県では西は須崎市から東は安芸市までの神社やお堂などにおいて、大きな（180 cm × 180 cm）芝居絵屏風<sup>1)</sup>を飾る夏祭りが行われているが、昔は土佐の夏の風物詩として今よりも多くの地域の人びとに親しまれていた。図1のように隔年、不定期、現在は行われていない等のところもあるけれども、10カ所ほどは毎年、夏祭りに芝居絵屏風を飾っている。土佐固有の芝居絵屏風の起源は江戸時代終わりごろであり、幕末から明治維新の激動の時代に土佐の町絵師として活躍した弘瀬金藏（林洞意）（1812-1876）、通称、絵金が芝居絵屏風を描き始めた。次第に弟子たちが出来てからは絵金派と呼ばれる絵師のグループになり、師匠の絵金の死後も昭和初期まで描き継がれた。幕末から明治にかけて土佐藩（後の高知県）の農山漁村の人びとは歌舞伎や人形浄瑠璃などの地芝居を数少ない娯楽の一つとしていたこともあり、芝居を題材にした芝居絵屏風を高いお金と引き換えに絵金や絵金派の絵師たちに描いてもらい、夏祭りに神社やお堂に奉納する目的で飾って楽しんでいた。芝居絵屏風には疫病退散や魔除けなどの祈願も込められていたが、芝居以外の娯楽が増えるにともない、とりわけ映画が身近なものとなると、高知県下で芝居絵屏風を飾る地域も少なくなり、いつの間にか絵金や芝居絵屏風は多くの人びとの記憶から失われていった。

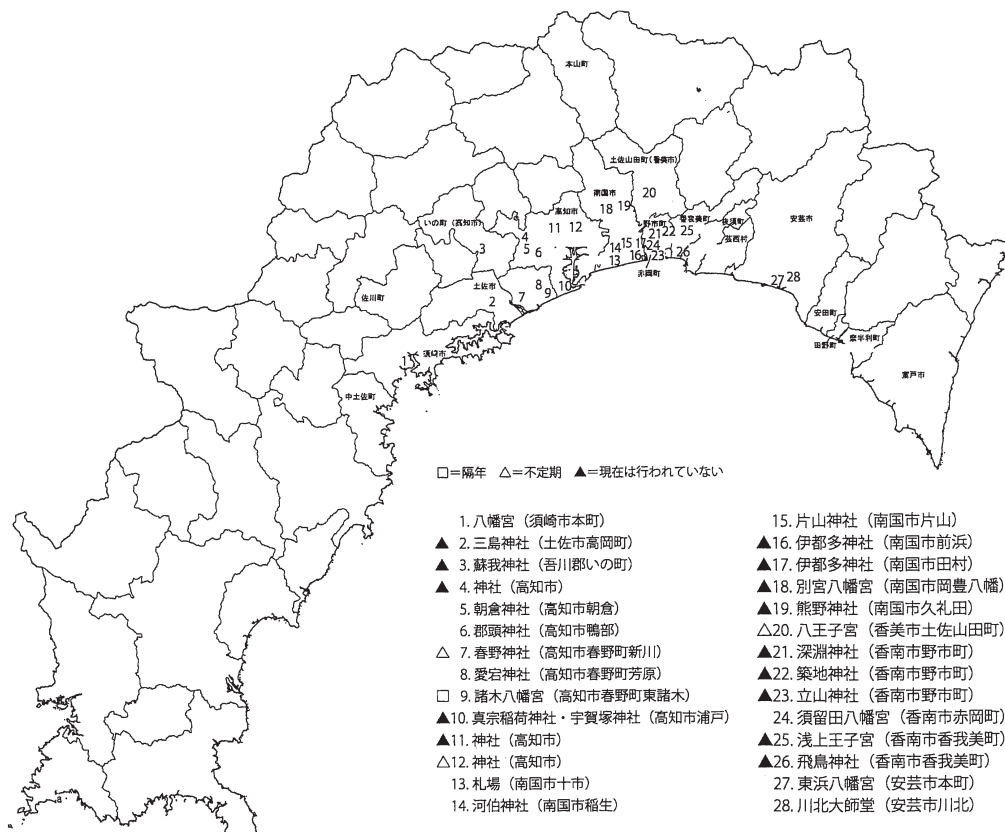
絵金の死から約90年後、1960年代の対抗文化と呼ばれる時代の下で絵金と彼の芝居絵屏風が再び注目されるようになり、総合雑誌『太陽』で「特集 土佐の芝居絵」が組まれたことを皮切りに画集『絵金 幕末土佐の芝居絵』が出版された。さらに1970年代初めには絵金の映画が制作され全国の映画館で上映されたり、東京、大阪、京都、神戸の大手百貨店などで「絵金展」が開催され、高知県以外の地域の人びとにも絵金と彼の作品が知られるようになった。それらの現象を総称して高知新聞や全国紙の読売・朝日・毎日新聞は「絵金ブーム」と名づけた。1970年代以降、絵金に関する出版物は着実に増えていくが、高知新聞以外の全国紙では絵金と芝居絵屏風が取り上げられることも少なくなり、「絵金ブーム」という言葉も使われなくなった。

「絵金ブーム」から約半世紀が経過し、絵金に関する出版物や資料はかなり蓄積されているとはいえ、「絵金ブーム」に関する社会学的研究は見当たらない。本稿では、「絵金ブーム」が到来する前後の絵金関連の新聞記事<sup>2)</sup>や出版物を取り上げ、歴史社会学的視点から「絵金ブーム」の背景と経過について考察してみたい。

## 2 「絵金ブーム」の用語をめぐる

「絵金ブーム」という造語は絵師の絵金と外来語のブーム（boom）を合成したものであり、ブームについては各種の『社会学事典』に独立の専門用語として掲載されているわけではなく、学術関係の事典類では辛うじて『大衆文化事典』に学問的説明が見られる<sup>3)</sup>。そこで、本稿ではブームの学問的規定にはこだわらずに、新聞等の実際の使用例を中心に検討してみる。1970

図1 芝居絵屏風を飾る夏祭りの神社等の分布



[出所] 絵金蔵 (2013:174)。

(注) 夏祭りに芝居絵屏風を飾る神社や地域数は年度によって変わる。

図1は2012年時点の分布状況であるが、近年は主に芝居絵屏風の保存と祭りを担う人手不足の問題などから毎年、飾ることは止めるところも少なくない。

年前後に「絵金ブーム」という言葉が各種の新聞や出版物等でくり返し使われるようになるが、それよりも15年ほど前に「絵金ブーム」という言葉が高知新聞の記事に出てくる。当該の記事は絵金の長い説明と彼の作品「大原女」から構成されており、紙幅の都合上、終わりの4行ほどの文章を引用してみよう。

狩野派の窮屈さを嫌って生涯町絵師として終わった。名声は県下にあまねく注文殺到、大は六曲の本間 (ほんけん) 屏風より小は神祭の絵馬に至るまで描き盛りの絵金ブームはなかなか花やかだったに違いない。

(『高知新聞』1956.6.16朝刊)

この記事を書いた田岡耕作は高知市に近い町で生まれ、高知県教育委員などを歴任し高知県文化賞を受賞した画家であり、1950年代から60年代にかけて高知新聞の記事を何度も執筆している。もちろん、当時の田岡は後の「絵金ブーム」を知らずに記事を書いている。全体の文章を読むと、幕末から明治維新のころに町絵師となった絵金が描いた芝居絵が評判になり当時の

土佐藩の多くの地域から注文が殺到したことを、「絵金ブーム」と表現した。なぜ1956年時点で「絵金ブーム」という言葉を使ったのだろうか。

第一に、1954年ころから高知新聞には絵金の作品が発見されたという記事がくり返し出てくることから、恐らく画家の田岡は絵金の作品に関心を持つようになり、絵金が絵師として最盛期だった幕末から明治維新の時期に「ブームのような花やかさがあった」と推測したのだろう。第二に、「ブーム」というカタカナ文字は1955年版の『現代用語の基礎知識』<sup>4)</sup>に代表的な外来語として掲載され、「好景気で活気を呈すること」（自由国民社 1955:903）と定義されている。田岡が『現代用語の基礎知識』を読んだうえで「ブーム」という言葉を用いたのかどうか不明であるが、その用語には馴染んでいたのではなかろうか。田岡は1965年にも同じ趣旨の長い記事「秋草ばなし〈27〉絵金発掘」（『高知新聞』1965.11.27朝刊）を書いているが、彼の二つの記事以外に「絵金ブーム」を使ったケースは見られないので、「絵金ブーム」の用語を使い始めたのは田岡と考えてよさそうである。注意すべき点は、1970年前後の「絵金ブーム」以前は幕末・明治維新のころの絵金の名声と大活躍のことを示す言葉として使用されていることである。そこで、1970年前後の「絵金ブーム」は絵金の死後、約100年ほど経ってから起こったブームであり、現代の「絵金ブーム」として区別しておきたい。

絵金が健在だった最盛期のブームと約100年後の「絵金ブーム」とを橋渡しする記事が1967年の高知新聞に掲載されている。北村直兄記者が執筆した「土佐路〈132〉絵金の芝居絵 祭りに息づく原色の魅力 百年を経て再び浴びる脚光」であり、下段の家具の宣伝広告を除けば、全面に長い文章と赤岡町の夏祭りの芝居絵屏風の大きな写真が掲載された、強烈な印象を与える記事である。

俗っぽさが受けて、幕末の県下一円にすばらしいブームを巻き起こした。特に祭りと芝居以外には楽しみがなかった当時の人たちは、競って絵金の芝居絵を求め、絵金の名は子供にまで知られたらしい。……絵金の絵には再び春がやってこようとしている。一昨年あたりから起こった再評価の動きだ。百年目のリバイバルである。

（『高知新聞』1967.7.21朝刊）

高知新聞の記者だった北村は田岡の記事を踏まえ、絵金の最盛期のブームについて背景と理由を指摘しながら、そのうえで1960年代後半から現れ始めた「絵金の百年目のリバイバル」について言及している。この記事では、「絵金ブーム」という用語は使用されていないけれども、現代の「絵金ブーム」が予言されている。「一昨年あたりから起こった再評価の動き」という文言は、1960年代前半までに高知県下で絵金の作品の発掘が進み、後述の廣末保や藤村欣市朗を中心とする、全国的な情報発信の活動が現れてきたことを示している。北村の予言どおり、1968年夏には、「“絵金ブーム”の前ぶれ 初の豪華画集出版」（『サンケイ新聞』1968.7.25朝刊）という記事が出てくるが、廣末や藤村たちが編集した絵金の画集が未来社から出版されたことを受けとめて書かれた記事である。そして、1970年初めになると、「絵金ブーム」という言葉を使って現代の「絵金ブーム」について言及した高知新聞の記事が次々と現れるようになる。

全国的な絵金ブームの中でこれまで幻の絵として長い間探し求められていた絵金の横轢（よこのぼり）がこのほど香美郡赤岡町の衣料行商、原春寿さん（61）方から見つかった。作品としても傑作だが、万葉仮名で俳句がしたためられており、絵金の才能をうかがわせる貴重な資料として関係者の注目を集めそうだ。（『高知新聞』1970.6.11朝刊）

この記事で注目すべき点を挙げると、「全国的な」という言葉を付けて1970年前後の「絵金ブーム」について言及しており、近世の土佐藩の範囲に限定されていた約100年前の「絵金ブーム」とは異なっている。また、絵金の最盛期のブームは、夏祭りに飾る芝居絵が土佐藩の各地で評判になり注文が殺到したことであつたのに対して、約100年後の「絵金ブーム」の実態は、「絵金の発見」であり、絵金の出版物の刊行、映画の制作、作品展などが全国レベルで行われたことである。1971年の全国紙には「絵金ブーム」に関連する記事が数多く見られるようになる。高知県出身の山本駿次朗は、1987年に出版された単著『絵金伝』のなかで1970年前後の「絵金ブーム」を総括すると同時に、興味深いことを書いている<sup>5)</sup>。

二十年程前、ある雑誌が「土佐の芝居絵」という特集をしたのがきっかけで、それから数年間にわたって、ちょっと異常な絵金ブームが続いた。東京のM・Sという二大百貨店に続き、大阪の百貨店でも相次いで絵金展が開催され、……出版界も素早く便乗して、豪華画集「絵金」「絵金素描集」を出し、……若手の美術評論家が大真面目で著名な美術雑誌に、「大蘇芳年にも比すべき異端の芸術」と書き、北大路欣也の美男の絵金が国立劇場の舞台に現れ、土佐出身の映画監督中平康は自費を投じて「闇の中の魑魅魍魎」を製作した。（山本 1987:21）

山本は高知県を離れ、東京を拠点にテレビの教育番組を制作しつつ、いろいろな本を書しており、同じ土佐出身の弘瀬金藏が「絵金」として日本の中央でブームになったことを冷静に見つめ直している。引用文には出てこないが、山本によれば弘瀬金藏だけが「絵金」ではなく、土佐では金藏が生まれる前から、優れた絵師や職人のことを「えきん」と呼んでいたとのことである。ここでは山本の主張の真偽は問わないことにして、弘瀬金藏の芝居絵屏風が「絵金ブーム」の中軸となったことを指摘しておきたい。

### 3 現代の「絵金ブーム」が到来する以前

#### —1927年から1964年までの関連資料を中心に—

さて、絵金（弘瀬金藏）の作品や弟子たちの言い伝えを除くと、彼の生涯に関する同時代の文字の資料はほとんど残されていない。そのため、これまでの多種多様な絵金研究の成果を調べても、30歳ころに贋作事件への関与を疑われ土佐藩の御用絵師の地位から追放された後、町絵師となって60代半ばで亡くなるまでの住所や生活の正確な情報は得られない<sup>6)</sup>。また、約100年前の「絵金ブーム」の時期から大正時代までの芝居絵屏風と夏祭りに関する詳細な資料も見当たらない。将来、どこかに眠っていた絵金関連の資料が発見されるかもしれないけれど



も、現在の時点で手に入る情報を前提にして、現代の「絵金ブーム」が到来する以前の関連資料を考察していこう。

年代の古い順から関連資料を取り上げてみるが、絵金が亡くなってから約50年後、昭和初期になると、高知県の学校教師などが執筆した本や高知県の郷土史のなかに絵金に関する記述が出てくる。類似する記述が多いので、重複を避けて山本淳『土佐美術史』と永瀬潔編『高知県誌』における重要な部分だけを引用してみよう<sup>7)</sup>。

弘瀬竹友斎は洞意とも号す、通称は金藏俗に呼んで絵金と称す、本姓は林氏にして後に弘瀬氏を継ぐ初めに蓮池町に住し絵を業とし柳栄と号す、後に池添揚斎の門に入り石里洞秀に狩野派並に和画を学び晩年に及び筆致輕妙にして之に及ぶものなし川田小龍と技を競ひその上にあり、召されて山内家の御絵師となる。筆力奔放にして舞鶴奔蛇の勢を示しその巧妙なること驚くの外なし、その遺作は吾川郡神谷村郷社天岩戸開天神社に絵馬として数点を蔵し……。

(山本 1927:534)

同じ流に前村洞和、同洞泉があり、後れて柳本洞素、弘瀬洞意、宮田洞雪があった。洞素以下は晩年が明治にかかって居る。……一つ面白い事には御抱絵師でも末になると正格の作以外に風俗画様の雑画を描いて居る。それには拘束が無く面白いものがある。其の尤もなるものは洞意即後の絵金である。その門から相當よくかくものが出て氷結の野に一脈の春水を通じて居る。

(永瀬編 1933:229-230)

山本の『土佐美術史』は図版を含め約600ページにもおよぶ大著であり、土佐の美術の歴史を古代から近代まで網羅しているが、絵金についての記述は土佐藩の御用絵師の経歴に依拠している。狩野派に学んだ絵金の絵師としての能力は非常に高く評価されているとはいえ、町絵師となってから民衆の注文に応じて芝居絵屏風を描いた経歴の記述は欠落している。二番目の『高知県誌』には、「風俗画様の雑画」と「その門から相當よくかくものが出て」という文言があり、町絵師となった絵金の作品の特徴を把握するとともに、弟子を養成する彼の能力を評価している。ただ、上記の他の資料も概ね類似した記述になっているため、土佐独特の民俗としての芝居絵屏風と夏祭りについて具体的に書かれた資料は残念ながら見当たらない。

明治維新以後、1945年までは日本独自の近代化や富国強兵の政策の影響もあり、民衆の要望に応じて絵金が描いた芝居絵屏風と民俗行事の夏祭りは必ずしも文化財として保存すべき対象とはならなかった。幕末から明治初期の「絵金ブーム」が過ぎ去った後、日本独自の近代化政策に加えて映画などの娯楽が広がるにつれ、芝居絵屏風が放置されたり、夏祭りに飾ることを止める地域も増えた。そのような状況が変わるのは戦後になってからである。日本が敗戦から立ち直りかけた1950年代に入ると、絵金の芝居絵屏風を見なす気運が高まり、高知県の各地で「絵金の作品の発見」が行われる。

①土佐の代表的な浮世絵師として有名な絵金こと弘瀬洞意の十三枚屏風絵（大絵馬）が、こ

のほど香美郡赤岡町で発見され得難い郷土資料として近く県立中央図書館で公開、改修の後赤岡町で町の文化財として永く保存されることになった。（『高知新聞』1954.4.15朝刊）

- ②香美郡赤岡町から幕末の土佐代表浮世絵師絵金の芝居絵屏風が県図書館に出品されて話題となったがこんど同郡野市町深淵元県社深淵神社拝殿からも同じく絵金の作と伝えられている芝居絵屏風義経千本桜など二枚折り十双が発見された。……昔は神祭のとき飾られたとのことであるが数十年出したことがなく大分破損しており部落では修理を加え保存することになっている。（『高知新聞』1954.4.24朝刊）

- ③徳川時代末期の本県の代表的浮世絵画家川田小竜と絵金（広瀬洞意）が描いた絵馬と絵馬台がこのほど香美郡土佐山田町八王子神社社務所の屋根裏から発見され、二十四、五の両日の同神社夏祭り当日四十八年ぶりに一般に公開され人気を集めた。（『高知新聞』1960.7.26朝刊）

1950年代から70年代までの高知新聞には、「絵金の作品の発見」を知らせる記事が数多く見られるが、本稿にとって重要な点が含まれている上記の①、②、③を選んでみた。①の赤岡町は、町絵師となった絵金が比較的長い期間、生活した場所であり、多くの芝居絵屏風が残されており、町内の須留田八幡宮の夏祭りに芝居絵屏風を飾る行事が維持されてきた。また、①の引用文に出てくるように、赤岡町で発見された絵金の作品が当時の県立中央図書館で公開された。このように赤岡町は現代の「絵金ブーム」の最も重要な拠点となった地域であり、後に絵金蔵（えきんぐら）という資料館を開設し、現在に至るまで多種多様な絵金の関連資料を保存し公開すると同時に、芝居絵屏風の夏祭りを熱心に行っている。他方、②と③の引用文で注目すべき箇所は、「昔は神祭のとき飾られたとのことであるが数十年出したことがなく」、あるいは「絵馬と絵馬台が……同神社夏祭り当日四十八年ぶりに一般に公開され」という文言である。須留田八幡宮とは対照的に、深淵神社と八王子神社（現在の八王子宫）では長い間、芝居絵屏風は飾られることもなく、神社の建物の中に据え置かれてきたという。昔の「絵金ブーム」と現代の「絵金ブーム」の間に、芝居絵屏風の夏祭りには長い空白期間があったことになる。

須留田八幡宮や高知市の朝倉神社などの少数の神社を除けば、多くの神社や地域では同じような長い空白期間があったため、1950年代から高知新聞が伝えるような「絵金の作品の発見」が連鎖反動的に現れた。1970年代に国鉄と広告会社が協力して「ディスカバー・ジャパン（日本発見）」のキャンペーンを推進した結果、古き良き日本を訪ねるブームが日本全体に広がったが、それよりも15年ほど前から高知県下では規模や分野が異なるとはいえ、類似した現象が現れ、「絵金ブーム」の下地が準備されていた。



## 4 現代の「絵金ブーム」が到来する過程

### —1965年から1971年までの関連資料を中心に—

平凡社の1966年4月号の総合雑誌『太陽』で「特集 土佐の芝居絵」が全国に向け情報発信され、その後、1968年7月には豪華な画集『絵金 幕末土佐の芝居絵』が未来社から出版され、「土佐の絵金と芝居絵」は全国に知られるようになってきた<sup>8)</sup>。さらに、1970年からは東京や関西の有名百貨店では、「絵金展」が開催され、絵金の芝居絵の実物が評判を呼び、1971年には絵金の映画も制作され全国の映画館で公開された。いわゆる「絵金ブーム」が到来した。ここでは「絵金ブーム」が到来する過程を、1965年から68年までと、1969年から71年までの二つの時期に区分して考察してみよう。

#### 4.1 総合雑誌『太陽』の「特集 土佐の芝居絵」と画集『絵金 幕末土佐の芝居絵』

さて、高知県における「絵金の発見」の盛り上がりを受けて絵金の作品は、1965年から全国に向けて様々な形で宣伝され情報発信されていく。画集『絵金』の「あとがき」を兼ねた「第四部 鼎談あとがき」（廣末・藤村 1968:180-189）には、1965年から68年までの興味深い経緯が回想風に書かれている<sup>9)</sup>。1965年5月に高知市の播磨屋橋近くの飲み屋に廣末、藤村、および絵金研究家の高知大教授八波直則が集まり、「絵金の特集」を作り、平凡社の総合雑誌『太陽』に掲載をお願いしようということになった。1966年4月号に間に合わせるため、急きょ前年秋に朝倉神社、赤岡町と須留田八幡宮、土佐山田町の八王子宮の「芝居絵屏風の夏祭り」を各地域の人びとに依頼し再現してもらい、平凡社の担当者とともに取材し写真撮影した。その結果、無事に1966年4月号として『太陽』の「特集 土佐の芝居絵」が出版された。

高知新聞には「鼎談あとがき」の内容を裏づける記事が掲載されている。「平凡社が発行している月刊誌『太陽』に紹介されることになり、急きょ組み立てられ、公開された」（『高知新聞』1965.9.4朝刊）、「絵金が中央の雑誌『太陽』で大々的に取り上げられようとしている」（『高知新聞』1965.9.10朝刊）。さらに、『太陽』が出版された際には、「雑誌『太陽』が四月号で絵金の特集をしている。……一世紀前の土佐に生きた大衆画家と、彼の作品を通して知る、ふるさとの庶民の体臭と息づかい。参考になる見もの、読みものだ」（『高知新聞』1966.3.18朝刊）。絵金の特集には、朝倉神社（写真1）、赤岡町（写真2）と須留田八幡宮、土佐山田町の八王子宮（写真3）のように「芝居絵屏風の夏祭り」として設定された姿の写真、および廣末、藤村、八波の絵金論が収録されている。

また、「鼎談あとがき」では、1965年11月に刊行された廣末の単著『もう一つの日本美』において絵金を取り上げたことについても言及されている。その本に収録された「大衆のなかの『かくし田』」（廣末 1965:160-177）の冒頭に絵金の2つの芝居絵屏風の図版と半ページほどの説明文が出てくる<sup>10)</sup>。その当時、廣末は法政大学教授であり、日本の近世文学・演劇の研究者として「もう一つの日本美」と「悪場所の発想」の視点から注目すべき数々の業績を発表していた。高知県出身の著名な学者の廣末が「絵金ブーム」の最も重要なキーマンであり、高知県の郷土史家の藤村と高知大の八波たちと協力する形で絵金の調査研究と情報発信の輪が広

写真1 高知市・朝倉神社の芝居絵屏風



〔出所〕 小林編（1966:51）。

〔注〕 朝倉神社では毎年、氏子地区ごとに芝居絵屏風を準備し飾り付けをしている。  
現在は神社の参道に6つの地区がそれぞれ絵馬台の両面に4枚の芝居絵屏風を飾っている。

がっていった。「絵金ブーム」の過程の歴史社会的背景を考える手がかりとして、廣末の代表的な絵金論ともいえるべき「幕末転形期の芸術」の一部を引用してみよう。

士大夫的な、あるいは、旦那的な美術鑑賞眼や倫理観にとって、絵金の歌舞伎絵は、野卑で、あくどく、悪達者な、下等大衆の娯楽品であり、消耗品であった。だが、上等階層の反発は、絵金のむしろ歓迎するところだっただろう。絵金ははっきりかれらを向うにまわしているからだ。問題は、絵金を止揚する過程で絵金を発見しなおすということができないまま、依然として埒外に無視しつつけてきた近代と、その芸術観にある。日本近代の芸術観が絵金を抹殺しつつけた。従って、いま絵金を紹介することは、そのまま、ある主張を意味することにもなる。芸術の大衆性。大衆的であるがゆえに創造的・革新的でありえた芸術。芸術観念の解放。近代超克のための遺産として、それは発見され評価されねばならない。たんに、地方的な物珍しさに訴えようとするためのものではない。

（廣末・藤村 1968:105-106）

この引用文には、廣末が「幕末土佐の絵師・絵金」の存在を全国に向けアピールしようとした理由が、いささか過激ではあるが、力強い文言で表現されている。廣末の絵金論は、「もう一つの日本美」と「悪場所の発想」という彼の独自の視点から展開されており、1960年代の時代状況に共鳴したものである。すなわち、1960年代に欧米などを中心に近代合理主義に対する

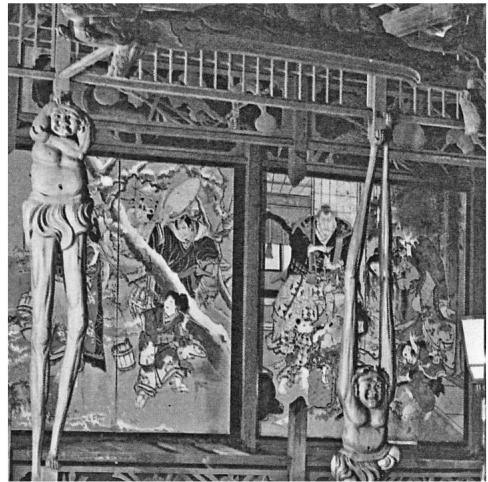
写真2 香美郡赤岡町の芝居絵屏風



〔出所〕 小林編（1966:50）。

〔注〕 香美郡赤岡町は2006年3月1日の合併により香南市赤岡町になった。須留田八幡宮の夏祭りに神社の境内にも飾っていた本物の芝居絵屏風は赤岡絵金祭りの創設後、芝居絵屏風の保存の観点などから町内に飾るようになっている。

写真3 香美郡土佐山田町・八王子宮の芝居絵屏風



〔出所〕 小林編（1966:50）。

〔注〕 香美郡土佐山田町は2006年3月1日の合併により香美市土佐山田町になった。絵馬台が大きく複雑なため、組み立てに職人的技能が必要であり、現在では保存の問題もあり、かなり年度を空けて飾っている。

様々な異議申し立ての運動、いわゆる対抗文化（カウンターカルチャー）が噴出したが、日本でもほぼ同時代的に既存の制度に対する異議申し立ての運動や文化が現れた。幕末・明治維新という激動の時代に絵金は土佐の町絵師として大活躍したが、約100年後、1960年代の激しい異議申し立ての運動に呼応するかのように絵金の芝居絵屏風などの作品が社会の表舞台に再浮上してきた。

1965年以来、廣末と緊密に連携しながら絵金の調査研究活動が続けていた藤村は、『絵金ブーム』の高知県の重要なキーマンであり、『太陽』と『絵金』において郷土史と民俗学の視点から詳しい絵金論を書いているが、廣末の論述と相互補完的な形で共鳴し合っている。『太陽』の絵金の特集と豪華な画集『絵金』は、東京の廣末と高知の藤村を中心として多数の人びとや地域団体が協力した結果、出来上がった共同作品であった。そのことは、『絵金』の「鼎談あとがき」の最後に、「本書が成立するうえでお世話になった左の方々に、末尾ながら厚く感謝の意を表します」（廣末・藤村 1968:189）として、順不同で書かれた個人の氏名や各種の団体名の多種多様さからもわかる。

高知新聞には、1960年代後半になってからも、高知県の土佐市、春野村（現在の高知市春野町）、須崎市、伊野町（現在の吾川郡いの町）などにおける絵金や絵金の弟子たちの作品の発見を伝える記事が見られる。当時の対抗文化というグローバルな時代状況だけでなく、大都市との経済や文化の格差に直面する高知県の市町村の活性化に向かう動きによって後押しされ、「絵金ブーム」が高知県の全域に浸透するようになった。



#### 4.2 全国紙の「絵金」の記事と大都市の「絵金展」

全国の店頭で販売された総合雑誌『太陽』の「絵金の特集」と豪華な画集『絵金』の刊行を通じて、日本全体、とりわけ東京や関西の大都市圏の人びとにも絵金の名前が知られるようになる。読売、朝日、毎日の東京本社が全国紙に絵金の記事が登場するのは、1967年からである。「真夏の夜の幻想 土佐赤岡の芝居」（『読売新聞』1967.8.2夕刊）が最も早い時期のものであり、千葉大学の比較文学担当の太田三郎教授が執筆した非常に長い記事である。推測になるが、1966年4月号の『太陽』の「絵金の特集」を読み、高知県赤岡町に足を運んで夏祭りや芝居絵を実際に見たうえで、その情景について気持ちを込めて書いている。また、画集『絵金』の紹介が読売と朝日の東京本社がの紙面に掲載されている（『読売新聞』1968.8.15夕刊、『朝日新聞』1968.8.16朝刊）。

1970年になってから、全国紙に絵金関連の記事がくり返し現れるようになる。大半は絵金の映画、絵金の本の紹介、および絵金展の記事であるが、1970年前後の時代状況と絵金を関連づけた記事も見られる。絵金の映画については、読売、朝日、毎日の各紙が競うように取り上げており、いずれも興味深い解説を加えた記事であるが、ここでは朝日新聞の記事の一部を引用してみよう。

映画『闇の中の魑魅魍魎（ちみもうりょう）』が完成した。最近ブームになっている土佐の画家、絵金の青春像を、同郷の中平監督がはじめて自分のプロダクションでつくったものだ。主役の絵金には状況劇場の磨赤児、彼に重大な影響を与える遊女雪に歌手の扇ひろ子という異色キャストで、中平監督はカンヌ映画祭に出品すると張り切っている。公開は四月下旬、松竹・東急系の映画館の予定。……新藤兼人氏の脚本は、狩野派が支配していた当時の画壇への反逆者というだけでなく、社会体制への反逆者として、若き絵金像をつくりあげている。（『朝日新聞』1971.3.19夕刊）

『闇の中の魑魅魍魎』の原作は、1970年に出版された講談社の『小説現代』の2月号に掲載された榎本滋民作の「血みどろ絵金」であり、上記の記事にあるように新藤が絵金を当時の画壇と社会体制への反逆者として脚色し、さらに状況劇場の磨赤児を絵金役にした映画である<sup>11)</sup>。脚本家や配役などから考えると、1970年ころの対抗文化の特徴を反映した内容になっているといえよう。中平は自分のプロダクションで意欲的に制作し、カンヌ映画祭に出品したけれども、残念ながら受賞できなかった。ただ、テレビの勢いに押され映画が斜陽化した時期とはいえ、絵金の映画は全国の映画館で上映されたので「絵金の名前」の全国化に貢献した。

映画と並んで絵金の本の出版と紹介の記事も現代の「絵金ブーム」を推し進めた力となった。絵金をタイトルにした本の紹介記事の代表的な事例について見出しを挙げると、「広末保・藤村欣市朗編 絵金の白描（未来社、1,500円）」（『毎日新聞』1971.5.9朝刊）、「きょうの本 絵金権力への反逆こめた資料綿密な画集」（『読売新聞』1971.5.12朝刊）などがある。前者の『絵金の白描』は絵金の芝居絵のデッサン集であり、彼の絵師としての優れた力量を示しており、後者の資料綿密な画集とは光潮社から出版された『絵金 EKIN』というタイトルの高価な本で

あり、1968年の画集『絵金』よりも多彩な執筆者たちによって書かれた、異色な内容となっている<sup>12)</sup>。

絵金をタイトルにした単行本とは別に、1970年秋に美術雑誌『みづゑ』の10月号で図版や論文を含め、全37ページの特集が組まれた<sup>13)</sup>。「特集：絵金＝幕末土佐地狂言怨念図譜」という特集名で、藤村欣市朗「邪霊送りの絵師、金藏」、横尾忠則「前近代への嫌悪」、浜口富治「食いつく絵金の泥絵」など、5年前の『太陽』の特集よりも過激なタイトルと内容の論文から構成されており、やはり対抗文化の特徴が色濃く出ている。とりわけ、3人目の執筆者の浜口は高知県赤岡町を拠点に活動していた前衛芸術家であり、戦後の早い時期から赤岡町の夏祭りで絵金の芝居絵屏風を見て芸術的価値を高く評価し、廣末や藤村たちに絵金の作品を紹介していた。『太陽』の絵金特集を裏方として支えたキーマンのひとりだった<sup>14)</sup>。

1970年から、全国紙や高知新聞には絵金の映画や本の紹介の記事に劣らず、東京都内のターミナル駅の大手百貨店で開催された絵金展の記事が目立つようになる。例えば、「点描 荒々しく衝撃的 土佐の『絵金展』」（『朝日新聞』1970.11.10夕刊）、「絵金展 6日から渋谷・東急百貨店本店で開幕」（『毎日新聞』1971.8.2夕刊）、「若ものにうける『絵金』 ショッキングな反逆性と大衆性」（『読売新聞』1971.8.11朝刊）など、興味深い見出しを掲げている。朝日、高知、読売の各新聞の記事から本文の一部を引用してみる。

- ①約百年間、土佐の土蔵に埋もれていた『絵金』九十余点を集めた絵金展が池袋西武百貨店で開かれている。初公開。絵金が絶えず話題になりながら、実物を見る機会はほとんどなかっただけに異常なほど好評だ。……絵金展のポスターをデザインしている横尾忠則氏の作品が、絵金の前ではいかにも新鮮味を欠いてみえるのはおもしろい。

（『朝日新聞』1970.11.10夕刊）

- ②絵金の作品はロウソクの灯で鑑賞するのが最良といわれるだけに、会場構成も土佐の風土を背景にした“夜祭”の表現で統一されている。杉木立の参道をあしらった夜道の両側に絵金ちょうちんを十三点配し、中央の広場に……など大きなびょうぶ絵を木ワクの台の上に飾るなど立体的な構成だ。

（『高知新聞』1970.11.11朝刊）

- ③満たされざる泰平ムードにけんたいし、なにか変わったものを、ショッキングなものを求める大衆が絵金を再発見したのかもしれない。絵金展の会場には若い人びとが意外に多いのに驚く。若い人ほど変化を求め異様なものに敏感なのかもしれない。……床の間の芸術や時の権威へのちょう笑、その反逆性と大衆性が現代人の心にも強く訴えかけるのでは……。

（『読売新聞』1971.8.11朝刊）

①の朝日新聞と②の高知新聞の記事には、東京都内で初めての絵金展（11月6日～11日）を記者が実際に見に行った時の会場の様子が書かれている。朝日新聞の記者は、絵金展の評判がかなり良いと伝えているのに対し、横尾忠則の絵金展のポスターについては辛口のコメン

している。もちろん、横尾自身は事前に高知県赤岡町に来て絵金の作品をしっかりと見ており、『みづゑ』の絵金特集にも的確な論文を書いている。②の記事は、高知新聞の記者らしく、「土佐独特の芝居絵屏風の夏祭り」の臨場感を演出する会場構成に注目している。③の読売新聞の記事は、1971年8月6日から18日まで渋谷の東急百貨店本店で開催された絵金展の会場の様子について、記者の時代状況的認識を交えて伝えている。三つの記事には、絵金を再浮上させた時代の状況や雰囲気に関する記者のとらえ方が書かれており、特に全国紙の①と③には高度経済成長期の日本独自の対抗文化的な状況を背景とする新聞などのメディアの姿勢が現れている。

東京都内だけでなく1971年6月には大丸大阪店、大丸神戸店、大丸京都店という関西の老舗百貨店でそれぞれ6日間ずつ連続して絵金展が開催された。その絵金展の図録『祭礼の中にうごめく土佐の絵金展』では、絵金の映画を完成させた中平康が「絵金に憑かれて」というタイトルの挨拶文を寄せており、「『闇の中の魑魅魍魎』は、私のセミ・ライフワークとして取り組んだ」という言葉で結んでいる<sup>15)</sup>。絵金の本の出版、全国紙の報道、日本を代表する大都市での絵金展の開催などから考えると、絵金没後100年を記念するかのよう、「絵金ブーム」は1971年にピークを迎えたといえよう。

## 5 おわりに ―「絵金ブーム」のその後―

『大衆文化事典』によれば、ブームは広義の流行現象一般であり、一時的流行と熱狂的大流行の両方を含むものであるとともに、マスメディアの報道も重要な構成要素になっているという<sup>16)</sup>。既述のように、1970年前後の「絵金ブーム」は絵金最盛期の「ブーム」における芝居絵屏風の注文の殺到ではなく、「絵金の発見」である。いつの間にか記憶から失われ放置されていた「絵金」を発掘し見直し、様々な形で全国に情報発信した結果、生まれた社会文化現象である。必ずしも熱狂的な大流行ではないけれども、くり返し全国紙で絵金の映画や出版物が紹介されたり展示会の様子が報道されたりしたという意味では「絵金」は流行現象になった。問題は、絵金に対する人びとの関心が薄れてしまい、ブームは一時的な流行に終わったのかどうかである。

1970年代中ごろ以降、「絵金ブーム」という言葉は高知新聞や全国紙には見られなくなるが、「絵金と芝居絵屏風」が忘れ去られたわけではなく、むしろ、絵金関係の出版物は着実に増えていく。本稿では詳しい出版物のリストは省略し、代表的な本だけを挙げると、1980年代までの日本美術史の研究成果を集大成した『日本美術史事典』には絵金と芝居絵の項目が掲載されたり、最新の『日本美術全集』にも絵金の図版が収録され詳しい解説も書かれている<sup>17)</sup>。また、作品の管理と保存の視点から遠方での展示会はほとんど行われなくなるが、地元高知の県立美術館では大規模な絵金の記念展が1996年と2012年に開催され、図版と解説を含む、非常に大部な図録が刊行されている<sup>18)</sup>。

高知県立美術館だけでなく、絵金にゆかりの深い高知県内の市町村では絵金の作品を保存する地道な活動が続けられていると同時に、幕末・明治維新のころよりも数は減っているものの、今も変わらず芝居絵屏風を飾る夏祭りが行われている。町絵師となった絵金が活動の拠点とし



た赤岡町では、1977年から既存の夏祭りの規模を拡大した赤岡絵金祭りが開催されるようになり、1993年には土佐絵金歌舞伎伝承会が結成され、絵金の芝居絵屏風にちなんだ歌舞伎が夏祭りで町内の芝居小屋の弁天座などにおいて上演されている。さらに、2005年に絵金蔵が開設され、絵金の作品の保存と調査研究の活動を続けるとともに館内に絵金の多彩な常設コーナーを設け展示している<sup>19)</sup>。

今から約50年前の「絵金ブーム」をきっかけに絵金の存在が全国に知られるようになり、絵金に関連する本は途切れることもなく出版されており、質的にも深く掘り下げられた内容を含むものが見られる。機会を改めて、「絵金ブーム」のその後の動向に関して詳細な論述を行う予定である。

## 注

- 1) 近世の江戸の浮世絵に見られる芝居の絵に限らず、芝居絵は多種多様であるが、本稿では、絵金や弟子たちが描いた、土佐の夏祭りに飾る大きな芝居絵を芝居絵屏風と呼ぶことにする。芝居絵屏風だけでなく、絵金や弟子たちの芝居の白描画、絵馬提灯、横幟などを含む芝居の絵を総称する場合は、芝居絵という用語を使うことにする。芝居絵の詳しい内容については、服部（1993）を参照されたい。
- 2) 本稿では、主にオーテピア高知図書館に所蔵されている各種新聞の次のデータベースを参考にした。高知新聞紙面データベース、毎索、聞蔵Ⅱ、ヨミダス歴史館。
- 3) 石川ほか編（1991:678-679）を参照されたい。
- 4) 戦後発売の『現代用語の基礎知識』には、1950年代から「ブーム」というカタカナ文字が外来の現代用語として掲載されている。
- 5) 「絵金ブーム」のころに、「絵金と双壁 大蘇芳年作品『血の晩餐』 古今の刃傷、殺害のテーマ」（『読売新聞』1971.7.9朝刊）という記事で大蘇芳年、絵金、奇想の画家の歌川国芳を取り上げて「怪奇な表現が現代人にアピールしているようだ」とコメントしているが、山本はこの記事を踏まえているのかもしれない。また、山本は絵金展の会場として「東京のM・Sという二大百貨店」と書いているが、「T（東急）・S（西武）」ではなかろうか。なお、奇想の画家をめぐる問題については、辻（2004）を参照されたい。
- 6) この点については、吉良川（2008）を参照されたい。町絵師となった絵金の行動に関する複数の仮説を吉良川は検証しているが、それでも不明な点が残る。
- 7) 牧ヶ野（1936）には絵金の芝居絵屏風の図版が掲載されているが、絵金については簡単な記述しかない。土佐の美術史の新しい成果については甲藤（1993）を参照されたい。
- 8) 『太陽』は平凡社という中央の総合雑誌であり、当時の発行部数は不明であるが、全国の店頭で鮮やかな写真入りの「絵金の特集」を見た者も多かったと考えられる。興味を持った読者は2年後の豪華な絵金の画集を鑑賞したのではなかろうか。
- 9) 「鼎談あとがき」には飲み会での集まりの会話が私的な内容を交じて詳しく文章化されており、「絵金ブーム」の経緯を考察するための非常に重要な資料である。
- 10) 1965年5月に高知市内の集まりで「絵金と芝居絵」について話し合い、それを踏まえ廣末は「大衆の中の『かくし田』」の主題ではないが、あえて冒頭に絵金の芝居絵屏風の図版を入れたのかもしれない。廣末の視点は日本美術史の辻惟雄の視点にも関連しているが、その点については辻（2004）を参照されたい。
- 11) 榎本は劇作家・演出家であり、彼の1970年作の「血みどろ絵金」は後に杉本ほか（2011:110-142）に所収された。
- 12) 光潮社編集部（1971）は、中平が映画「闇の中の魑魅魍魎」の制作過程で企画した内容をベースにした高価な（28,500円）本であった。
- 13) 『みづゑ』で「絵金の特集」が組まれた経緯については、浜口（2000:36-37）によれば、浜口が美術

出版社の編集長の生尾慶太郎に依頼したとのことである。

- 14) 浜口（2000:36-37）によれば、戦後、絵金が一般に知られていない時期に高知県立図書館長の川村源七からの申し出を受け、赤岡の絵金の芝居絵屏風を図書館で展示した。残念ながら、その該当箇所には年月日の記載がない。
- 15) 近森ほか（1971）の図録には、絵金の芝居絵屏風だけでなく絵巻物、絵馬提灯、横幟、白描も含まれ、中平の挨拶文とともに近森が丁寧な解説を書いている。
- 16) 石川ほか編（1991:678-679）を参照されたい。
- 17) 山下編（2013）では、古田亮「19世紀日本美術の知覚変動」において絵金が言及され、論文とは別の箇所に図版と図版解説も掲載されている。紙幅の都合上、本稿では引用や考察は差し控えたい。
- 18) 高知県立美術館（1996）、（2012）を参照されたい。
- 19) 赤岡町史編纂委員会（2009）を参照されたい。

## 文献

- 赤岡町史編纂委員会，2009，『赤岡町史 改訂版』。
- 絵金蔵，2013，『絵金資料調査報告書 第1集』香南市・絵金蔵運営委員会。
- 絵金蔵運営委員会，2011，『絵金読本』香南市商工水産課。
- 近森敏夫・中平康編，1971，『祭礼の中にうごめく 土佐の絵金展』毎日新聞社。
- 伝統芸術の会，1971，『伝統と現代 第十二巻』学芸書林。
- 浜口富治，2000，『海と赤の幻想』高知新聞社。
- 服部幸雄，1993，『江戸の芝居絵を読む』講談社。
- 廣末保・藤村欣市朗編，1968，『絵金 幕末土佐の芝居絵』未来社。
- 広末保・藤村欣市朗編，1971，『絵金の白描』未来社。
- 生尾慶太郎編，1970，『みづゑ10月号』美術出版社。
- 石田豊・田辺三郎助・辻惟雄・中野政樹監修，1987，『日本美術史事典』平凡社。
- 石川弘義・津金澤聰廣・有末賢・佐藤健二・島崎征介・藺田碩哉・鷹橋信夫・田村穰生・寺出浩司・吉見俊哉編，1991，『大衆文化事典』弘文堂。
- 自由国民社，1955，『現代用語の基礎知識』。
- 甲藤勇，1993，『土佐画人伝』高知市民図書館。
- 吉良川文張，2008，『土佐の芝居絵・金蔵 絵金 その謎の軌跡』高知新聞社。
- 小林祥一郎編，1966，『太陽4月号』平凡社。
- 光潮社編集部，1971，『絵金 EKIN』光潮社。
- 高知県教育委員会，1996，『高知絵金保存調査報告書—絵金及びその後裔—』。
- 高知県立美術館，1996，『開館三周年記念展「絵金展」 土佐の芝居絵と絵師金蔵』。
- 高知県立美術館，2012，『絵金 極彩の闇』grambooks。
- 牧ヶ野教信，1936，『美術工芸品の蒐集とその鑑賞』高知県教育会。
- 扇田昭彦，1995，『日本の現代演劇』岩波書店。
- 社会学会社会学事典刊行会，2010，『社会学事典』丸善。
- 重松実男，1957，『稿本 高知市史』高知市。
- 杉本章子・宇江佐真理・あさのあつこ，2011，『衝撃を受けた時代小説傑作選』文藝春秋。
- 辻惟雄編，1992，『幕末・明治の画家たち—文明化のはざまに』ぺりかん社。
- 辻惟雄，2004，『奇想の系譜』筑摩書房。
- 山本淳，1927，『土佐美術史』高知県教育会。
- 山本駿次朗，1987，『絵金伝』三樹書房。
- 山下裕二責任編，2013，『日本美術全集 第16巻』小学館。

（原稿受理日 2019年9月27日）